



科学の凄味, 魅力

●
浅野敏雄 Toshio ASANO

旭化成株式会社 常任相談役



筆者のキャリアは、新事業の創出とその基盤となる新製品の研究開発が主である。振り返ると失敗もあるが、科学上の発明発見が新製品に繋がったり、重要課題を一挙に解決せたりする幸運にも遭遇した。もちろん、発明発見だけでは事業の成功には至らず多様な力が必要であったが、科学の凄味, 魅力を実感した。科学が新たな産業を創り、産業の振興が科学の進歩を産み出す。科学と産業は「ニワトリとたまご」の関係にあるが、両者の異なる特徴に触れ、科学の強化を訴えたい。

昨年リオ・オリンピックの応援に行き、陸上スタジアムで日本男子リレーチームの銀メダルに心から拍手した。ほかの競技でも幸い金、銀、銅メダルの荣誉に立ち会った。スポーツでは、金、銀、銅メダルが存在する。産業でも、自動車や電機製品を例にとるまでもなく、1位だけでなく、2位、3位以下も顧客から評価される。また、競合が先行しても、より良い製品の上市やより適切なマーケティングによって挽回も可能である。

しかし、科学は、最も早く仮説を提唱・実証した研究者だけに荣誉を与える。同じ内容の論文であれば世界で最初に研究誌に投稿受理された研究者だけが評価される。極言すれば、科学の世界は、金メダルだけであり、銀メダル以下には拍手もない。このように、科学は、スポーツや産業以上に厳しい一面を持っている。そのため、科学者は、自分の研究と同じ研究を誰かに先を越されないかドキドキしながら、より早く成果を発表するために必死に研究を進めている。寝るのも惜しい毎日であろう。筆者も一時期はそうであった。

厳しい研究競争をしている科学において、潤沢ではない研究費や語学のハンディ等がありながらも、これまでの日本の科学者、特に化学者の業績に筆者は頭が下がる。しかし、昨今日本の科学力が落ち込んでいるとの指摘が多い。野依良治先生も本誌4月号の論説で鋭く論じている。産業界では、科学力・事業力の衰えた企業は退場し、別の強い企業が登場するという新陳代謝が働く。しかし、科学の大きなセクターである大学は構造的に自浄作用が働きづらく、気づいたときは手遅れの可能性がある。したがって、明日の科学者を育てる教育機能も担っている大学の科学力の強化を優先的に議論することに異論はないであろう。産業界としては、教養や基礎研究の重要性も論じて欲しい。最近、政府が科学技術予算の大幅増の方針を示しているが、実効性のある予算の配分や運用を始め、論点は多い。

今後の日本を俯瞰すると、日本の科学を強くするための議論や行動を今こそ大に行うべきである。化学会は、ほぼ3万人もの化学者の集まりであり、その構成は、大学、研究機関、行政、企業と主要なセクターを網羅している。産官学の連携が唱えられているが、その有力メンバーがすべて参加しているのが学会の特徴である。学会が日本の科学を強くするために果たす役割は大きい。

© 2017 The Chemical Society of Japan